氏　　名	三浦優子
学 位 の 種 類	博士（社会学）
報 告 番 号	甲５０７号
学位授与年月日	２０１９年3月３１日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	日本人エクスパトリエイト・コミュニティに関する社会学的実証研究 ――駐在員女性配偶者の日常生活実践の事例――
審 査 委 員	（主査） 水上　徹男（立教大学大学院社会学研究科教授） 前田　泰樹（立教大学大学院社会学研究科教授） 木村　自（立教大学大学院社会学研究科准教授） 太田麻希子(立教大学大学院社会学研究科准教授） 桜井　厚（一般社団法人日本ライフストーリー研究所代表理事）

Ⅰ．論文の内容の要旨

（１）論文の構成

本論文は、6 章で構成されている。第 1 章「問題の所在と分析方法」では、本論文の背景と目的並びに調査方法・調査対象地・調査協力者について提示、第 2 章「トランスナショナルな社会空間とエクスパトリエイト・コミュニティ」では、エクスパトリエイト・コミュニティがトランスナショナルな移住者やネットワークが展開されている社会空間にあること、またエクスパトリエイト自身が、トランスナショナルな存在であることを提示した。そのうえで、Cohen が定義したエクスパトリエイトの概念をキーとして、この概念に対する疑問などを示した。これに関連して日本人エクスパトリエイトに関する先行研究を整理した。第 3 章「デュッセルドルフの日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴と変容」では、デュッセルドルフの日本人が中心になって運営している団体や外務省の刊行物などの資料を基に、日本人数などのデータに基づいた比較的マクロ的な視点での分析を行った。他方で、教育機関を含めた日本人が組織運営の中心的な役割を果たしている団体からの聞き取り調査によるミクロ的な視点からの記述を行った。第 4 章の「駐在員配偶者の日常生活実践」では 19 人のデュッセルドルフ駐在員配偶者の集中的なインタビューを基にエクスパトリエイト・コミュニティで、これらの女性がどのような日常生活実践を行っているかを類型化した。第 5 章の「デュッセルドルフ日本エクスパトリエイト・コミュニティの特徴」では、第 2 章で提示した Cohen の知見をもとにたてた問いに対し、駐在員配偶者からのインタビュー・データ及び日本人関連機関への聞き取り調査などの実証データから考察した。終章「トランスナショナルな社会空間の日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴」では、これまでに提示されたエクスパトリエイト・コミュニティの概念と実証データのつながりや相違点、今後の課題について提示した。

（２）論文の内容要旨

本研究は、トランスナショナルな社会空間に形成されるエクスパトリエイト・コミュニティを描き、そのなかに暮らす駐在員配偶者の生活の特徴を提示することが目的である。調査対象は海外駐在員である夫に帯同した人たちであり、国境を越えて移動する女性たちの日常生活実践についてインタビュー・データ収集を行った。なお本論文では、日本の多国籍企業から派遣された駐在員を典型的なエクスパトリエイトと捉えて、彼らが海外で形成する母国と類似した社会をエクスパトリエイト・コミュニティと定義した。

本研究の調査対象地は、ドイツのデュッセルドルフである。当市はドイツ中西部に位置し、ノルトライン・ヴェストファーレン州都の経済都市で、多くの日本企業を擁している。実際、第二次世界大戦後に形成されて、現在でも成立している日本人エクスパトリエイト・コミュニティが存在する。ドイツ・デュッセルドルフへの赴任の夫に伴い駐在した配偶者 19 人（内、帰国者 6 人）に対して集中的なインタビューを実施したが、彼女たちの生活世

界の特徴を示すにあたり、ライフストーリー・インタビュー調査法を用いた。それ以外にも、日本人が中心になって組織している団体、例えば日系不動産経営者など計 12 人、デュッセルドルフ在住のドイツ人 2 人、ドイツ人と国際結婚した日本人永住女性 1 人にインタビューを行なっている。本研究の第 2 章で取り上げたが、Cohen は、1970 年代に海外へ移動したアメリカ人エクスパトリエイトなどのコミュニティについて研究をまとめた。この時、ホスト国における生活習慣等の違いの程度差やコミュニティの大きさの差異などにより相違はあるものの、全体からみてエクスパトリエイトのコミュニティは、特定の共通の特徴を持つと述べている（Cohen 1977: 77）。その背景として「一時的滞在」と「特権階級」という 2 つの要因をあげており､アンクレーブ化したコミュニティの成立要因ともなって、負の側面も併せ持つことになる。Cohen の知見をふまえて、以下のような 6 つの問いを立てた。（1）アンクレーブ化したエクスパトリエイト・コミュニティの閉鎖性、（2）エクスパトリエイト・コミュニティ内の結束と連帯、(3) エクスパトリエイト同士の軋轢や摩擦、(4) 同胞エスニック集団の他のコミュニティとの乖離、（5）妻の社会関係と夫の仕事関係、（6）妻・母であることの深刻な適応、である。

第 3 章では、デュッセルドルフの日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴と変容を明示した。日本政府の統計資料などを用いて、デュッセルドルフの日本人人口の推移や長期滞在者の職業別の特徴を示した。また、日本人による居住動向、戦後からの日本経済の発展・経済のグローバリゼーションにともなう日本人コミュニティの変化を時系列に提示した。また、教育機関を含めた日本人組織などからの聞き取り調査のデータなどを用いてコミュニティの現状や変化を内部から捉えた。これらのデータに基づき、駐在員女性配偶者の多様な生活意識を描写することができた。第 4 章では、デュッセルドルフ駐在員配偶者のインタビュー・データからエクスパトリエイト・コミュニティにおける女性たちの日常生活実践特徴を以下のカテゴリーに分けて描写した。(1)「駐在員配偶者」カテゴリーに期待される規範、(2)「駐在員配偶者」同士における関係性、(3) 結束と連帯、(4) 妻・母としての立ち位置、(5) 駐在生活における自己への意味付け、(6) エクスパトリエイト・コミュニティからの解放、(7) 中断されるライフコース、(8) 自国の家族とのつながり。本論文で、デュッセルドルフの日本人エクスパトリエイト・コミュニティには、「駐在員配偶者」が同質性を生み出すような社会構造が内在していることを確認できた。いままで日本人エクスパトリエイト・コミュニティには、「整った日本人向け生活インフラ構造」、「日本人同士が堅固に結びつき均質性がある」などの特性があるとみられてきた。このように日本人エクスパトリエイト・コミュニティが、一つの同質的なコミュニティという認識の背景には、個々人のミクロな生活世界にあまり関心が向けられてこなかったことがあげられる。本研究では駐在員配偶者の生活世界に焦点を当てることで、これまで注目されなかった特性を示すことができた。例えば、駐在員配偶者という制度的な縛りがあるために、現地で仕事ができず経済的自立に対して悶々とした気持ちを抱いたり、日常生活実践において駐在員配偶者に期待される規範の維持を意識しながら、駐在生活における自己へ意味

づけを行なおうとするアンビバレントな精神世界を提示した。エクスパトリエイト・コミュニティの抱える課題は、トランスナショナルな社会空間の中で、政治、社会、経済というマクロな社会構造と深く結びつき、個々人が単独で対処していくことは難しい。しかし他方で、このエクスパトリエイト・コミュニティは駐在員配偶者たちを自国とホスト・コミュニティにおける、様々な集団や人びととつながりをもたらす可能性を広げる機能も持ち合わせている。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

本研究は社会学のなかでも、ライフヒストリー研究として位置づけられる。ドイツ・デュッセルドルフにおける駐在員配偶者を対象としており、2015年から2018年5月の間に調査対象地で実施したインタビューが主要なデータとなっている。データ収集に関しては、自身の10年に渡る現地の滞在経験に基づいたフィールドワークおよび日本人駐在員の配偶者だけでなく、日本人コミュニティ内の組織も対象とした集中的なインタビュー調査の蓄積がある。駐在員配偶者へのインタビューは、デュッセルドルフで実施されただけでなく、日本への帰国後に追跡調査としてのインタビューも含まれている。

会社の派遣などで海外に駐在する人をエクスパトリエイトと呼ぶが、本論文ではこのエクスパトリエイトの特徴について、関連文献のレビューや実証的なデータで提示した。ホスト・コミュニティであるデュッセルドルフに対しても、共通するような行動様式から、個々の駐在員配偶者によって様々なかかわり方がある点を示した。エクスパトリエイト・コミュニティ内においては、駐在員配偶者たちの社会関係は、夫の仕事の地位などが影響し、仕事に支障がないように気遣う社会関係が同じ駐在員配偶者たちとの間に結ばれる傾向がある。ホスト国において基本的に海外駐在員配偶者は、仕事を持たないため、このような状況がそれぞれの生活世界に影響することになる。現地で働けない環境を公的にとらえて「休憩」期間と割り切るケースや不満を抱えながらも義務感を持ち家族のサポートに徹する人、経済的自立ができないストレスを抱えた人などもいる。グローバル化が進み、国境を越えても、駐在員配偶者は自国の家族を身近に感じることになる。現地での自分の立場や帰属の在り方を模索しながら暮らすことになる。しかし、自国に暮らす親を案じたり、学齢期の子どもを日本に残してきたり、母子だけで先行帰国するケースも含めて家族の分断を生じさせる場合もある。

日本人エクスパトリエイト・コミュニティの特徴を明らかにするのにあたり、個々のケースの集中的なインタビューを行ってかなりのデータを収集してきた。そのため、多様な生活世界と個々のケースのアンビバレントな内面世界まで描き出した。

（２）論文の評価

本論文はエクスパトリエイト・コミュニティを描き、駐在員配偶者の生活の特徴を提示した。予備審査段階の修正要請に応えて、構成面の改善より、ライフストーリー研究のインタビュー・データから引き出された理論的な知見が明確になった。より具体的には、多数の駐在員配偶者のライフストーリー・インタビューによって、語り手の自己と家族のライフヒストリーおよびコミュニティ内における日常的な生活実践に着目し、エクスパトリエイト・コミュニティのもつ規範（日常生活のルール）の特質を示した。そのうえで、その規範への適応と逸脱行動での戸惑いや葛藤を丁寧に描き、駐在員配偶者の生活世界の現実を明確にしている。コーエンのエクスパトリエイト・コミュニティ概念に依拠しながらも、そこでは明確に言及されていない現実を駐在員配偶者の内的な世界から明らかにした点は高く評価できる。

本論文の調査結果にあたる4章においては、インタビューで語られた両義性をどのようにすくいとるかが、非常に重要な点になっていた。第一点として、「駐在員配偶者」カテゴリーに期待される規範に対して、さまざまになされる距離化、例外化、差異化のヴァリエーションが、いずれも規範自体に変更を迫ることなく、むしろ規範を維持することに寄与している。このような構図が上手く捉えられていたケースの中で、「駐在員配偶者」から距離をとりながら、自らをそのカテゴリーの外に置くという意味で差異化しながら、「駐在員配偶者」に何が期待されるか、という規範自体の維持が認められるなど、多様なあり

方を許容しつつ維持されている状況も描かれている。
　第二点として、駐在生活における自己への意味づけについて、あるケースでは経済的自立への葛藤と、デュッセルドルフでの主婦生活を満喫することとの両極が提示され、（ある意味で両義性をかかえながら）それぞれの人生が再記述されていく経緯が描かれている。ここでの両義性の考察については、さらなる敷衍ができたのではないか、という指摘もあった。
　その他にライフストーリーを集団や制度的な文脈と結びつけた解釈がかならずしも十分ではないのでは、という指摘もあった。その一つは、語り手である駐在員配偶者のエクスパトリエイト・コミュニティ内の社会的位置が十分には明確なっていないため、語りの内容を社会的文脈に位置づけることが難しい点、もう一つはライフストーリーを語る配偶者の生活世界は、ジェンダー的視点を入れて解釈することでより明確に理解できると考えられるが、ジェンダーの制度や組織の枠組みとその変化について十分な言及がなされていない点である。
　しかしながら、日本人エクスパトリエイトの個々のケースの集中的なインタビュー・データ自体が非常に詳細に記述されたものであり、かなりの量のトランスクリプトを蓄積した上でのデータ解析に基づく成果であり、豊富なデータの価値、オリジナリティが高く評価できる。そのためコミュニティ内部の生活者の行動様式による特性だけでなく、内面のアンビバレントな世界まで描き出すことができた。ライフヒストリー研究、また現代のエクスパトリエイトの特性を示したマイグレーションの研究領域にも貢献しており、審査委員会は公聴会終了後の審査委員会において全会一致で同氏に対して合格の判定を行なった。